ヒーローＬＶ１

きぃ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ヒーローＬＶ１

【Ｎコード】
Ｎ３０８５Ｋ

【作者名】
きぃ

【あらすじ】
今回の依頼は人探し。
簡単な依頼だったはずなのに、”最強の魔術師”を名乗る妙な奴が、いきなり襲い掛かってきやがった。
おまけに、謎の女や喜一郎までやって来て、なんだかおかしなことに。
いいか、ひかる。とにかく、死ぬんじゃねーぞ！

プロローグ（前書き）

小説「ガーゴイルおるたなてぃぶ」以降「おるた」を参考にしておりますが、一部設定が異なります。ご了承ください。

プロローグ

「そんなところでなにをしてるの？」
「ああ、お前か・・・・・・」

真夜中。
誰もが眠る時間帯に、地下の研究室から明かりが漏れていた。
ランプがあるとはいえ、その場所はとても薄暗かった。

「さぁ、ここに立ってごらん」
見知らぬ円陣を前にしても、少しも怖くはなかった。

それが、悪夢の始まりになるとも知らずに。

＊

「人探しですか？」
「はい。わたしの夫を探して欲しいのです」
そういって机の向かい側に座って居た女性ー依頼人は1枚の写真を手渡してきた。受け取った写真にはいかにもやさしそうな男性の姿が映っている。
――素敵な人。この人が旦那さんか。

写真を一通り眺めた後、もう一度依頼人の顔を見た。
依頼人の名前は木本春江さん。３０代くらいのきれいな女性。淡い水色の着物がよく似合ってる。旦那さんがいなくなったせいか、年齢より老けて見える。

「つーか。それ、警察の仕事だろ？」
わたしは頭の上にいた“黒い鳥”を思い切り、投げ飛ばしてやった。

鳥は壁に叩きつけられ、すごい音がした。

あまりダメージは負ってないはず。
もし、あいつが大ダメージを負ったら、私まで痛いもの。

依頼はかなり久しぶりなのだ。
依頼人の機嫌を損ねるわけには行かない。

「おまかせください。必ず見つけてみせますから」

自動人形

「ガー助！　たのんだわよ」
「へいへい」
黒い鳥ことガー助は不満そうに言いながらも、部屋の窓から飛び出していく。
私も後を追って、空を見上げるとガー助がどこかへ飛んでいくのが見えた。
――ああやって、空からガー助に探してもらえば問題ないはず。
ちなみにガー助は動物ではなく、私が錬金術で作り出した自動人形。
両肩にある紅白の注連縄がチャームポイント。

「あっ、ひかるちゃん。なにしてるの？　仕事」
「千秋ちゃん！　うん。そうだよ。人探し」
レーダーを見ながら、商店街を走っていたら、声を掛けられた。
見ると松葉杖をついた少女――千秋ちゃんだった。
「そっか。どんな人？　わたしにも見せて」

危なかしいなぁ。
と思いながらも手は貸さない。
手を貸すことは千秋ちゃんのためにならない。

「よいしょっと」
「はい。よくがんばりました」

ここまで来れた千秋ちゃんを思わずなでる。
だって、うれしいんだもん。
何度だって、なでたい。

「へへぇ。――じゃあ、早く写真見せてよ」
「はい。これよ」
依頼人から受け取った写真を千秋ちゃんに見せてあげる。
千秋ちゃんはちいさく唸りながら、写真を見つめている。

「ごめん、ひかるちゃん。わたしの知らない人だ」
「いいのよ。あやまらなくても地道に探すから」
『大変だ。ひかる！』
なに？
離れた場所から響く、ガー助の声は妙に慌てている。
何があったというんだ？

自動人形（後書き）

自動人形

ロボットのようなもの。
機動力は”魂の塩”と呼ばれる幻の物質。
そのため、いまだに魂の塩を見つけられた者はいない。

塊

「ごめん、ちょっと行って来るね」
いってらっしゃいという、千秋ちゃんの声がかすかに聞こえるが、
返事を返す暇はない。
レーダーを見ると、ガー助はそんなに遠くには行ってないようだ。

『ガー助！』
「ひかる。あんまあっちに行くなよ」
「えっ？」
翼をはためかせながら、路地裏の奥を見つけている。
もし、ガー助が人であるなら、険しい顔をしているに違いない。
――あの先に何かあるのか？

？
なにか、ある。
奥のほうに何かが落ちてる？

なんだ？
よく分からないけれど、塊か？
なんだかよく分からない、青い塊にゆっくり近づいていく。

――っ！
人だ。
男の人が倒れているのだ。

「大丈夫ですか」
「おい！」
男性は青ぽいスーツを着た５０代くらい。

白髪交じりだから、はっきりとは分からないけど。

でも、何でこんな人気のないところで、倒れているの？

男性に触れてみると異様に冷たい。

・・・・・・・えっ。

まさか。

「しっかりしてください」

私の声は叫び声に近かった。

男性を強く揺さぶってみるが、返事がないというよりそもそも息をしていない。

――死んでいるのだ。

『きゃあああああ』

最高の錬金術師

???　Ｓｉｄｅ

「あっ、やっと出たか。高原！」
「なに、東宮？　わたしは忙しいの」
何度もコール音を鳴らして、やっと電話に出たと思えば、高原は欠伸を交えながらのんびりと話し始める。
電話の相手は高原イヨ。世界最高の錬金術師。

「高原！　のんびり話している場合じゃない。ひかるのところで殺人事件が起きた」
「っ！　詳しい状況は？」
息を飲む音がして、高原の口調が変わった。
どうやら、やっと相手にも緊急事態だと分かってもらえたようだ。

「ああ、ひかるが言うには魂が抜かれているらしい」
「抜かれている？　それは自然死じゃないの？」
「いや、死んだ男性は健康そのもの。それどころか、１カ月前に会社で行った、健康診断ではあと３０年は生きられるとまで言われていたらしい」
「それは確かに妙ね。分かった、調べてみるわ」
「ああ、たのむ」
これでいい。高原から連絡を待とう。
ぼくも調べられる限り、調べるつもりでいる。

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

「ふぅ」

受話器を置いて一息つく。
――だいぶ気分が良くなってきた。
お兄ちゃんと話したおかげで、落ちついてきたみたい。
それにしても、なんだったんだ。・・・・・・あいつは。

事件は死体を見つけた、すぐ後に起きていた。

＊

「錬金術師か。久しぶりに会ったな」

いつのまに、後ろに。

振り返るとそこには妙な男がいた。
銀髪に黒マント。そいつは不気味に笑いながら、私に近づいてくる。
一種の変態かと思うような風貌だが、それとはあきらかに雰囲気が違う。

なに。こいつ。・・・・・・気味がわるい。

魔術

「すこしは楽しませてくれ！」
突然現れた男はにやにやと笑い続けている。
おまけに耳に付けているピアスが輝き始めている。

――魔術！
魔術は錬金術と違い専門的な知識が要らない。
それこそ、円陣の描かれた道具と魔力さえあれば、誰でも使えるようになる。
そのため、世界の1割が魔術師と言われるほど人気がある。
わたしも小さいころ、お父さんに指輪型魔術道具（初級レベル）を買って貰い、よく練習したものだ。

眩しい。
ピアスに輝きがまして、男の右手に炎が燈り始める。
――炎使い。

「おいっ、ひかる。なにボケッとしてるんだ！」
ガー助の声に我に返ったが、足が動かない。
――なんで、動かけないのよ。
何かの力で、地面に張り付いてしまったかのように、体が硬直してしまっている。

だめだ。殺される！

「伏せろ！」
「喜一朗くん」
高原喜一朗くん。風使いの魔術師であり、最高の錬金術師の息子さ

んだ。
一度は私と敵対していた彼だが、今ではこうして助けてもらっている。
喜一朗くんの手にしている刀が風を帯びている。
これも魔術道具。装飾品（アクセサリー）が多いがこうした刀型もある。
喜一郎くんはカーキ色の軍服をマントのようになびかせて、奴に刀を振り落とした。

魔術（後書き）

魔術（オリジナル設定）

魔術にはレベルがあり、初級・中級・上級に分けられる。
高度になればなるほど、使いこなすのが難しい。

役立たず

爆発音というのだろうか？
風と炎が相殺する音が路地裏に響き渡る。
「いい腕だ。だが、これではわたしは倒せない」
――すごい魔力！
急激な魔力の上昇を感じる。魔力を上げているらしい。
こんなことができるのは生まれつき魔力が高いか、強力な魔術道具だけだ。

「お前何者だ。この魔力只者じゃないな」
「いいだろう、貴様の腕に命じて教えてやる。わたしは最強の魔術師“アシド＝スタイン”だ」
アシド＝スタイン？
・・・・・・聞いたことがない。

たくさんいる魔術師の中でも、もっとも有名なのが世界最高の魔術師エリオル＝クローク。
だけど、アシド＝スタインなんて名は始めて聞く。

「笑わせるな。聞いたことないぞ。最強の魔術師なんて」
「そうさ。これから名を広めるのだからな。そのための犠牲になれ！　小僧」
「残念だけど、きっとあんたより年上だ。東宮！　もっと下がっていろ」
「うん。分かった」
喜一郎くんに呼ばれて、やっと体が動くようになった。
私のできることは、喜一郎の邪魔にならない場所に移動することだ。
・・・・・・我ながら情けない。

「東宮・・・・・・？　東宮ひかるか。たしか、日本に5人居る錬金術師の1人」
「ええ、そうよ」
「お前は戦わないのか？」
「おい、言い返してやれ。ひかる」

“言い返せないよ”
頭の上に居るガー助が怒りをあらわにしている。
確かにガー助の言うとおり、アシドはムカつく。

けれど、私に何が出来っていうの？
人探しだったので、武器を何一つ持ってこなかった。
にやついた顔で、私を見つめるアシドに返す言葉がなかった。

いまの私は無力だ。

光線

「思った以上になかなかやるな」
「くそ」
――喜一郎くん！
喜一郎くんは何度も奴が放つ炎を打ち消しているせいで、息が荒くなっている。
地面に膝を突いた姿なんて、初めて見た。
あの喜一郎くんが苦戦してるなんて。

そんなに強いんだ。あいつ。

「ガー助・・・・・・」
「いや、オレのレーザーじゃあ、あの炎は消せねぇよ」
「だよね」
炎の規模が大きすぎる。
ガー助に備わっている目からビームならぬ、口から光線では火力が足りず、あの炎は消せそうもない。

でも、このままじゃ。

「もういい。十分楽しめた」
『喜一郎くん！』
今まで以上に奴のピアスが輝きを増し始めている。
――これはまずい。
もう、何も考えてなかった。
私はただ喜一郎くんの前に立ちふさがった。
「おい。バカかお前」
「バカでいいわよ！　逃げるわけには行かないだから」

「ひかる！」
「――ガー助！　なにしてんのよ」
「たく、ほんと尻デカ天パー女を持つと苦労するぜ」
私の前で私をかばうように飛びながら、ガー助は口に光を溜めていく。
光線を放つつもりなのだ。

「ガー助！？」
ガー助が光線を放つとすごい爆発音とともに突風が吹き荒れる。
というかいい加減、人が集まってきてもいいと思う。
それくらいうるさい。

――足が。
突風に煽られ、体が吹き飛ばされそうだ。
もっと、踏ん張らないと。
こけそう。

アリア

「きゃあああ」
『ひかる！』
「うううぅ、大丈夫」
吹き飛ばされた上に、地面に叩きつけられゴロゴロと転がってしまった。
――鼻が痛い。
すりむいた鼻をさすりながら、顔を上げる。

煙が。
顔を上げて、すぐ目に付いたのは煙。
煙が辺りに充満し、どうなったのか分からない。

ん・・・・・・？
なんだ？
目を凝らしてみると煙の中に人影が見える。

・・・・・・女の子？
私と歳が変わらそうな子だ。

薄茶色の髪に黒のゴスロリ。
この場所では浮くはずの格好なのに、やけにかっこよく見える。
彼女は不適に笑っている。
「やっと、会えたわね」
「ああ、お前か。アリア」

なに？　なんなの・・・・・・？

『今度こそ貴様を殺す！』
「いいだろう。こいアリア！」
「言われなくても」
アリアさんから感じる強い憎しみとともに、彼女の指にはめられている指輪が光を帯び始める。

っ！
急激な魔力の上昇。
彼女もまたアシドに負けないくらいの魔力を帯び始めた。

うそでしょ？
・・・・・信じられない。
一日で、こんな強力な魔力の持ち主たちと出会うなんて。

目を開けてられないほどの光とともに、ビリビリと静電気のような音が鳴っている。
――雷使い。

ちょっと、まって。
こんな狭い場所で強力魔術（炎と雷）がぶつかったら、どうなるのよ。
今度は吹き飛ばされるだけではすまないかも。
これって、危ないんじゃない？

『死ねー！』
『ちょっと待って』
アリアさんの叫び声とともに雷が放たれ、わたしはまたしても吹き飛ばされた。

アリア（後書き）

魔力（オリジナル設定）

誰もが持っている”力”ではあるが、高い魔力を持つ者はそうそういない。

命

――星が見える。
どのくらい気絶してたんだろう？
意識が途絶えていたみたいだ。
仰向けだった体をゆっくりとうつぶせにする。
・・・・・・まだ立ち上がれない。

「けほっ」
――ちょっと焦げたみたい。
Tシャツとズボンはボロボロになってしまった。
髪の毛からも焦げた匂いがする。

いやだなぁ。
ぜったい、髪がちりちりになった！
ガー助がいたら“もともと天パーだから、分かんねーよ”とか言いそうだけど。

――痛っ！
いきなりの激痛。
胸をつかまれたような強い痛み。くらりとめまいが起きる。

「ガー助？」
――黒い鳥はどこ？
薄れる意識を何とか保ちながら、目で黒い鳥を探す。
視界がぼやけて、うまく定まらない。
大丈夫。あいつはまだ壊れてない。

あいつが壊れたなら、あたしも生きてはいない。
――だめだ。意識が。

＊

ガー助　Ｓｉｄｅ

俺は“生きているのか？”
いや、俺は生き物じゃねーんだから、生きているって表現はおかしいかもな。

薄っすら目を開けると目の前には壁。
また、叩きつけられたのかと思いながら、動いてみる。

ごとり。
少し動いただけなのに、体が不気味な音を立てる。

まさか。
どこか壊れたのか？
感覚なんてないのに、やたら体が重く感じる。

――悪い。ひかる。
姿の見えない相棒を思いながら、再び意識が薄れていった。
Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

悪魔

「どうかしたのか」
――っ。
あっ。
いつのまにか、上から見下ろされる形で見られていた。

「喜一郎くん。あいつ・・・・・・やばいかもしれない」
「ガー助が？」
「どうやら、あなたたちも無事だったのね」
「アリアさん」
彼女も無事だったみたいだ。
けれど無傷とまではいかなかったようで、せっかくのゴスロリ衣装が灰だらけだ。

「それじゃ。様子を見にきただけだから」
「ちょっと、待って！　教えてあいつはなんなの？」
無理やり起き上がり、そのまま立ち去ろうとしたアリアさんに聞いてみる。
彼女はアシドについて何か知っているはずだ。

「あいつは悪魔よ」
「悪魔？」
「あいつはあたしから、大切なものを奪っていったのよ」
「復讐か」
喜一郎くんも重く言葉を発する。
たぶん、他人事とは思えないのだろう。
彼もまた“錬金術”を恨みながら、生きてきたのだから。

「ええ、あたしはずっと奴を追ってきた。日本に来たのもそのため」
「でも、なんであいつは日本に来たの？」
それが分からない。
なんでわざわざ、こんな小さな島国に来たのか？

「それは最強の門番が居るから」
「ガーゴイルか」
――またガーゴイル・・・・・。どこかの町に居る最強の門番。
その正体はガー助と同じく、錬金術で作られた門番型石像だ。
ガー助もガーゴイルにあやかって同じ名前を付けた。
まぁ、”ガー助”で定着しちゃったけど。

「あいつは暇を持て余しているのよ」

悪魔（後書き）

ひかるの相棒　ガーゴイル

愛称”ガー助”。

カラスのように黒く、オウムのように愛嬌がある。

翼を広げると１ｍにもなる。

迷惑なやさしさ

「見つけたか――？」
「うん。でも、気絶してるみたい。あと、翼が壊れてる」
「それ、まずいんじゃないのか？」
「大丈夫。機能停止してないかぎりは」
ガー助は路地裏の端まで飛ばされて、灰で埋もれていた。
アリアさんは言うことだけ言って、どこかへ行ってしまった。

あいつが何だったのか――。
それを考えるより、まずはこいつを直す方が先のようだ。

＊おまけ＊

「ひかるちゃん大丈夫だったか！」
「伊藤さん」
――ん？
やけにタイミングがよくないか？
路地裏から出て、すぐにやってくるなんて。

「あのー、伊藤さん。いつから？」
「ああ、そりゃー、最初の爆発からだよ」
「じゃぁ、援護くらいしてくださいよ」
「危ないことはなるべくしない主義だ！」
いかにも、危なそうな人がよく言う。

しかもだ。
どうみても、極道（アレ）としか見えない人たちが、路地裏の入り口でうろうろしている。

組員の人たちだなアレ。
警察に通報されたら、どうする気だったんだ？
これじゃぁ、いくら騒いでも誰も来ないわけだ。
「ありがとうございます。封鎖はしてくれてたんですね」
「ああ、これくらい朝飯前だ」
お礼はちゃんと言っておかないと。
――怖いから。

錬金術

喜一郎　Ｓｉｄｅ

東宮は花屋に園芸用の土を借りるとコンクリートの上にばら撒いた。
何をするのかと思えば、土の上に円陣を描いている。

「見事なものだな」
「話しかけないで喜一郎くん。気が散る」
わるいと小さな声で謝罪する。

「ここをこうして、こうなって」
東宮は出来上がった円陣を見ながら、ぶつぶつ独り言を言っている。
錬金術は魔術と違い知識の学問だ。
お金と魔力が掛からない代わりに、少しでも理論がくずれると大変なことになる。

「よし、出来た」
出来上がった円陣の上にガー助を置くと光が溢れ出す。
光が収まるとガー助が“変わらない”姿で現れる。
「直ったのか？　あんま変わらないが」
「まぁ、応急処置みたいなものよ。完全に治すには材料がないと」
「だったら、こんなところじゃなく、家でやればいいだろう」
東宮の家はここの３階だというのに、なんだってこんな不便なところで練成するのか。
あいかわらず、あきれた奴だ。

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

まぁ、喜一郎くんの言う通りなんだけどね。
我ながら焦ってた。

「板垣さん。ごめんなさい。片付けておきますから」
「いやいいよ。いい物を見せてもらった」
渋い。
なんていい人。
店の前は土で汚れてしまったのにいやな顔一つしない。

それにしても、練成を行うための道具を忘れるなんて、術者失格だな。
持っていたとしても、描くのに時間がかかるから、戦闘には役立ないけど。

早くガー助を直してやらなきゃ。
でも――材料どうしよう。
材料を手に入れるお金が全くなかった。

錬金術（後書き）

お気に入り登録ありがとうございます。

おかげさまでＰＶ１０００超えました。

これからもがんばります。

寒気

「はぁ？　材料を取ってきてくれ？」
「そう。お願い」
「それはかまないが、練成すればいいだろう」
「違うよ。それでも、材料がいるんだよ」
喜一郎くんの頭に大きな？が浮かんでいるのが見えそうだ。
よく知らないから、起きる勘違いである。

「それで何を取ってくればいいんだ？」
「まずは大きな木かな。あとは鉄と銀」
「木と鉄はともかく、銀は時間掛かるぞ」
「うん、分かってる。お願い」
さてと、喜一郎くんが戻ってくるまでの間に、木本さんの手がかりくらい見つけなきゃ。

ぞく。
――なに？
「ひかるちゃん。どうしたの？」
「いえ。なんでもないです」
今頃になって、恐怖がやってきたのだろうか？
夏だというのにやたら寒い。

「顔色悪いよ。やっぱり、中に入っていきな」
「いえ、大丈夫ですから」
板垣さんには心配掛けられない。
ガー助を持って、逃げるように家に戻った。

「静か」

――とうぜんか
この階には私しか居ないし。
ここ3階は私がまるまる借り切っている。

玄関を閉めて、部屋の中に入ると余計静かになった気がする。
おまけにいつもより広く感じる。
うるさい鳥がいないせいだろうか？

あれ？
体から力が抜けていくのが分かる。

――気持ち悪い。
「うぅぅぅぅ」
もう、泣いちゃおうか？

・・・・プルルルル。
っ！
電話？

誰から？
ただの電話なのに、今は怖くてしかなかった。

「はい。鳥屋ですけれど」

お兄ちゃん

「もしもし、ひかるかい？」
「お兄ちゃん？」
電話の相手は東宮天祢（あまね）。私の叔父にして錬金術の師匠でもある。
「どうかしたのか・・・・・？　変だぞ」
「なんでもないよ。大丈夫」
「そんなわけないだろう！」
電話から怒ったような声が聞こえる。
お兄ちゃんはやさしいから、声を荒げることなんて、あまりないのに。
――っ。
だめだ。泣く。
どうして、お兄ちゃんはいつもタイミングよく電話してくるんだろう。

＊

いけない！
――寝ちゃった。
お兄ちゃんと話したことで安心してしまったのか、いつの間にか床の上で寝ていた。

急いで手がかりを探さなきゃ。
今度は喜一郎くんに怒られる！
私は慌てて外に飛び出した。

――気分がすっきりしてる。
もう大丈夫。

風を切るように走った。
しばらく、走ってからあることに気が付いた。
道具持ってくるの・・・・・・また忘れた。
取りに戻らないと。
何してるんだ。ほんと。

これでよしっと。
武器と練成道具をウエストバックにしっかり入れる。
ついでにボロボロだった服とズボンも取り替えた。

もう忘れ物はないよね。
入れたものを確認する。また戻ってくるなんて、ドジなことはしたくない。

お兄ちゃん（後書き）

東宮　天祢

イヨにつぐ天才錬金術師。
イヨにライバル意識を持っているものの、相手にされていないどころか、いいようにこき使われている。

夜更け

大丈夫だ。行こう。
・・・・・・どうやって探すかな。
勢いよくもう一度外に出たものの、どうやって探すそうかと悩む。
辺りは真っ暗。ガー助もいない。
入れてはいないけれど、私が持つ道具のほとんどが侵入者を見つけるためのものだ。

とりあえず、走って探すかな。
レーダーを見ながら、とくにあてもなく走る。
走ってみてから思う。
・・・・・・失敗だった。

暗すぎる。
人探しには向かない。
人に尋ねるにしても、こんな遅い時間に起きている人は少ないだろう。

さっきは何を考えて走ってたんだろう？
おそらくは何も考えてなかったように思う。

「ははははは」
笑っちゃう。
――笑うしかない。

ん？
ちょっとまって。
なんか今、レーダーに反応がなかった？

危なく見落とす所だった。
足を止めて、レーダーに反応があった場所を探す。

あっちか。
このレーダーは熱探知機の応用で、熱を持ったものを探せる。
昼間だと人の反応がありすぎて、特定の人物を探すことは難しい。
例えるなら、渋谷のスクランブル交差点で人を探すようなもの。

あれ？
家と家の間？
間違いなく、反応は家と家の細い路地からある。

「ん――？」
覗き込んでみると黒い塊のようなもの見える。

・・・・・・塊？
まさか。
そんなわけないよね。
さきほど見た死体と重なるけど、必死に首を振る。
悪いようには考えたくはない。

夜更け（後書き）

レーダー

人探しには向かないが、人以外のものには効果てきめん。

ガー助・ねずみ・ごきぶりなんかも探せます。

衝撃

家と家の間に、まるで隠すように落ちている塊。
これは夜でなくても、思わず見落としてしまうであろう。

・・・・・えっ？
「木本さん？」
依頼人から渡された写真が浮かぶ。
名前を呼んでみるが返事がない。

おそるおそる地面に倒れている男性に、近づいていくと顔がはっきりしてくる。
――やっぱり、木本さんだ。
次は口元。
息をしているのか、上から覗き込んでみる。
動いてない――。

「間に会わなかったわね」
「アリアさん・・・・・・どういうこと？」
魂が抜けたみたいに固まっていると、後ろから声を掛けられた。
彼女はどこまで知っているのか。

「あいつの仕業よ」
「あいつって、アシドとか名乗ってた奴のこと？」
「ええ。やつは魂を集めてるの。巨大魔術を発動させるためにね」

「何のために」
「魔力が足りないのよ。奴の魔力じゃ巨大魔術を発動できない。だから、魂で補おうとしているのよ。強い敵と戦っているのは、巨大

魔術を発動(あつめる)させる間の暇つぶしに過ぎないわ」
「そんな事のために」
怒りのあまり、アリアさんに怒りをぶつけそうになった。
生まれつき魔力が高い人間でも、巨大魔術を発動させるのは辛い。
魔力を上げるための道具もあるが、目ん玉が飛び出すほど値が張る。
そんなことのために人の命を犠牲にするなんて。

衝撃（後書き）

魔術道具（オリジナル設定）

安いもので数百円。高いものだと数千万円。
高度になるほど値段が張る。

一般的なものは中級レベルで数十万円。

目的

「そんなもの発動させたら、どうなるのよ」
「そうね、日本消滅（メテオ）くらいじゃないかしら？」

――っ！

ふざけてる。
何の目的で日本を消滅させようとしてるんだ。
『そんなことさせられない』
「ええ、その通りよ。だからこそ、早く取り戻さないと」

？

取り戻す？
なんのこと？
「あっ、ちょっと待ってよ。アリアさん」
だめだ。
――行っちゃった。

もっと、詳しく聞きたかったのに。

アリア　Ｓｉｄｅ

＝どうした？　早く、殺さないのか？＝
にやついた笑顔――。
あいつは楽しんでいた。
あんな状況だったのに。

ちゃらり。
・・・・・・殺せなかった。

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

＊

空が明るくなってきた。
――もうすぐ、夜明けだ。

「ほら、持ってきたぞ」
「わー、ありがとう。こんなにたくさん。お礼はいつかするね」
家に戻ってみると、喜一郎くんが山のように材料を採って来てくれた。
これだけあれば、ガー助の修理どころか当分は困らない。

「そうか。じゃー期待しないで待ってるか」
「あっ、信じてないな」
「じゃあ、今すぐ返せ」
「すみません。喜一郎さま」
前言撤回。
もうすでに困ってる。金銭面で。

等価交換

「いい、喜一郎くん。錬金術は等価交換なの」
「ああ、どっかの錬金術師が言ってたな」
喜一郎くん相手に錬金術の講座を始める。
多少錬金術を知っているとはいえ、喜一郎くんは素人に近い。
まずは基礎から教えないと。

「まず、材料を用意して円陣の上に載せる」
練成前に、研究用の机に錬成陣を書いておく。
その陣の上に、材料である木を乗せる。
まぁ、鉄でもいいんだけど、木の方が分かりやすいし。

「つぎに理論に基づいて、発動させると」
練成陣から光が溢れ、木炭が現れる。
「ねっ、こうやって、材料を変化させるのが錬金術なの」
「なんだか、３分クッキングみたいだな」
「まぁね」
墨を練成するまでに１０分くらいかかってるけど。
師匠クラスになれば、３分くらいで練成できるはず。
なんせ、まだＬＶ１ですから。

「だから、全くお金が掛からないわけじゃないんだよ」
それでも魔術よりはお金は掛からない。
安い材料から高価なものを錬成できるからだ。

「ふーん。奥が深いな錬金術」
「あれー？　錬金術に興味あるの？」
「バカ言うな」

「だよね」
恨んでいた錬金術を、そう簡単に受け入れられるはずがない。
でも、興味を持ってもらえただけでも、一歩前進だよね。

「次はミスリルね」
「鉄から鋼を錬成して、鋼と銀と合成させる。と」
「これ売ったら、高額で買い取ってもらえるぞ」
出来上がったミスリルを見て、喜一郎くんが言う。

うん。売れたらいいよね。
たぶん。売ったら捕まりますから。

等価交換（後書き）

錬金術

鋼の錬金術風。
実際（おるた）の錬金術は、ものすごくお金が掛かる。
ちなみにどっかの錬金術師とは、もちろんエドワードのこと。

番外編　―遭遇―（前書き）

喜一郎視点

番外編　―遭遇―

それを初めて見たのはまだ幼き頃――。
倉の中を探索もとい、遊んでいるときに発見した。
それは置いてあったというより、鎖で繋がれてあった。

「なにこれ？」
――黒い犬？
「あちゃー。やっぱり、見つかっちゃったかー」
振り返るといつからいたのか、頭に手を置いて笑う母の姿があった。

・・・・・「たはー」と効果音を入れるのは、どうかと思います。
実の息子にお茶目をアピールして、どうするんですか？

「お母さん。これなんですか？」
「これ？　門番型自動石像」
「いえ、よく分かりませんけど？」
「要するに守ってくれる石像よ」
「守る？」
――これが？
犬の形をした、ただの黒い石ころにしか見えない。
こんなものに、そんな力があるようには思えなかった。
だけど、母の言うことなら、なんだか信じられる。

＝これはね。私たちだけじゃなくて、日本も守ってくれるのよ＝
“守らなかったじゃないか！”

あいつは結局、守らなかった。
信じていたのに――。

何も守らなかったんだ。
たった、一人の少女さえも。

悪いな、東宮。
やっぱり、錬金術は憎しみの対象でしかないんだ。

番外編　―遭遇―（後書き）

門番型自動石像

犬がお座りした形の黒い石像。
いまではガーゴイルと呼ばれている。
ガー助とは比べ物にならないほど、強い。

復活

ガー助　Ｓｉｄｅ

「何だと！」

――なんだ？

ゆっくり目を開けると、ひかると喜一郎がなにか話しているのが聞こえる。

どうやら、叫ぶような声を出しているのは喜一郎のようだ。

めずらしいこともある。

『そんなことさせられるか』

「もちろんだよ。ガー助が起きたら、すぐに止めに行かないと」

つか、怒る姿も初めて見るかもな。

・・・・・なにがあったんだ。

喜一郎が怒るなんて、ただことではない。

「それにしても、日本を消滅させるなんて、何を考えてるんだ！」

「なんだと！」

「ガー助。起きてたの？」

起きてたわけじゃねー。

目覚めたんだよ。

聞き捨てならない話を聞いちまったからな。

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

「起きてたんなら、説明は不要ね。急いでアシドを探すわよ！」

「おうよ」
ガー助は生意気な返事を返して、私の頭に乗った。
いつもなら憎たらしいが、今はなんだか頼もしく感じる。
「俺は俺で探す。二手に分かれたほうがいいだろう。見つけ次第合図を送る」
「うん。お願い」
喜一郎くんも部屋の窓から、出て行ってしまった。
窓から出入りするのは止めてほしいのだが、今日ばかりは許そう。
プルルルル・・・・・。
＊
「たのだわよ。ガー助」
「まかせとけ」
ガー助が空高く飛んでいった。
空には雲が多いものの、太陽がまぶしく輝いている。
――チカッ。
黒いボディに太陽の光が反射する。
あれ？
おかしい。
ガー助は太陽の光に反射しないように作った。
なのに、雲が光ってる。
なっ。
雲の中に――円陣。
それは目を凝らさなければ、分からないほど淡い光を放ち、不気味

に存在していた。

円陣

「どうした。ひかる」
「ガー助、あれ」
空を飛んでいるガー助に対し、私はゆっくりと雲を指差す。

いつの間に・・・・・。
昨日はなかったはずだ。
いや、夜にあんなものがあったら気がつく。

「なっ、おい！　あれが発動したら、やばいじゃねーの？」
「分かってるわよ。だから、急いで！」
「ああ」

まずい。
早く何とかしないと。
――ガー助、早く見つけてよ！

ヒュルルルル～ドン。
背後で音だけの花火が上がった。
あの場所は――丘！

「喜一郎くんだ」
「おおっ！　やっぱさすがだな」
「感心してる場合じゃない。行くよ」
いまはバカ鳥と言い争っている場合じゃない。
私の足はそんなに早くはない。
走るのに集中しないと。

あらためて、もう一度空を睨みつけてみる。
先ほどと変わらず、上空に大きな円陣が浮かんでいる。
あれを発動させるわけには行かない！
わたしはさらに走る速度を速めた。

いた！　あいつだ。
小さな丘にアシドの姿が見える。
合図を送ってきた喜一郎くんの姿が見えない。
やられてしまったのだろうか？

『止めなさい！』
「ああ、お前か。貴様もわざわざ、やられにくるとはな」
貴様も？
やっぱり、喜一郎くんはっ。
奴のすぐ下には家々が覗かせている。

「ここから、一気に魂を吸い取るつもり？」
「いや、それではつまらない」
「だったら、何でこんな所にいるのよ！」
「巨大円陣の下準備のためだ」
巨大円陣というのは、空に浮かんでいるあれのことだろう。
私は魔術には強くないので、分からない単語が多い。

下準備

「下準備って何のこと？」
「巨大円陣を発動させるために、一週間前から、少しずつ円陣に魔力を注いでいた」
――気づかなかった。
一週間もの間、空にあんなものが浮かんでいたのか。

「だったら、魔力が集まったときに、一気に注ぎ込めばいいじゃない」
「それだと、時間がかかる」
誰かに見つかるリスクを減らすためか。
ここにいるのも同じ理由か。

確かにここなら、人が立ち寄らない。
この丘からの眺めは、私の市が一望できるほどいいが、柵がなく危険なため、人はめったに近づかない。

「一つ教えてくれる？」
「なんだ？」
「何の目的で、日本を消滅させようとしてるの？」

ずっとそれが知りたかった。
アシドが日本を消滅させる理由はなに？
そんなことをして、なんのメリットがあるって言うの。

「ただの暇つぶしだ」
『暇つぶしですって！』
「そう、わたしにとって、すべては暇をつぶすための余興にすぎん」

「そう分かった」
私をスカウト来た連中は、“私を試すため”に平気で私の大切な人たちを傷つけた。
それ以上にくだらない理由だ。
怒りでどうにかなってしまいそうだ。

「・・・・・・全力でぶっ潰す！」
「できるものならな」
――なんて、いやみな笑顔。
だけど奴の言うとおり、昨日は何も出来ないうちに終わった。
今度はそうは行かない。

天秤

「先手必勝よガー助！　７０％」
「ふざけろ８０％だ。日本がどうなってもいいのか」
「分かった８０％ね。それ以上持っていかないでよ」
私がペンダントをはずすとガー助の注連縄が青白く光る。

頭がクラクラしてくる。
私から何かが流れていく感覚――。
この感覚には慣れそうにない。

「よし、行くぜ！」
勢いよく飛び上がると、尾羽根から光の粒子がキラキラとこぼれ落ちる。
ガー助は口を大きく開けて光を溜め始める。

「ふん、悪あがきか？　まぁいい」
奴はさらに不気味な笑顔を浮かべるとピアスが輝き始める。
「悪いがこっちが早いぜ！」
ガー助が白い光線を吐くとアシドの耳どころか、体が徐々に凍っていく。
それをみて、ペンダントを首に掛けなおす。
これ以上、命が流れていくのをふせぐ。

「よし！」
「これで何とかしたつもりか？」

バキーン。

「なっ」
そんな。
私の命で強化された氷だぞ。

私とガー助の命は“ラーの天秤”によって、共有されている。
分かりやすく言えば、ガー助の命は私の命。
ガー助は私が命を与えれば、与えるほど強くなれる。
それをあっさり割るなんて！

言っとくけど、もうやれないぞ。
日本がどうとか、言う前に私が死ぬ。

奴の腕が、生み出された炎で包まれている。
強化された氷を一瞬で、溶かすほどの炎ということか。

今のが効かないなら、私に残された必殺技は１つしかない。
その必殺技を使うにはアシドに触る必要がある。

天秤（後書き）

共有された命

ひかるはある事故により死んだ際、ガー助に己の命を与えた。
つまり、ひかるの命が魂の塩の役目を果たしている。

引力

「ではこちらもいくぞ」
――来る！
アシドのピアスが輝きを増し、腕の炎はますます大きくなっていく。
こちらも武器を構える。
私が持ってきた武器は２つ。
というより、使える武器が２つしかなかった。

『いけぇ』
叫んでみたものの、私のしたことは持ってきた道具のスイッチを押しただけだ。
これで、アシドが転ぶはず・・・・・・だった。

「耐えてるし」
私が押した道具は師匠から貰った“月面体感機”。
警棒のような形をしていて、これさえあれば、周りの重力が思いのまま。
知ってる人でも、まず耐えられないのに。
それを堪えるのか、あいつは。

「これで終わりか？」

――やばい。
「てぃやー」
私は本能的にもう１つの武器、ロープのような物を投げつけた。
ロープはまるで意思を持っているかのように、アシドに絡みつく。

もちろん、ただのロープではない。私が錬金術で作り出した“エクスプロープ”

どおおおん。

手にしていた起動スイッチを押すと爆発が起きる。
爆発と同時に土煙が巻き起こる。
別名“爆発ロープ”。（ガー助命名。私の本意ではない）

これくらいでは、あいつは死なない。
けれど、動かなくなってくれたら、それでいい。
動けなくなった所で、止めを刺せばいいのだから。

・・・・・・えっ？
煙の中には、全くダメージを負ってなさそうなアシドの姿が見える。

うそでしょ！
――どうすれば、近づけるのよ。

恐怖

「つまらないな。本当に」
アシドはにたにたと笑いながら、私のほうに近づいてくる。
腕の炎は消えたとはいえ、アシドの笑顔は恐怖でしかなかった。

――っ！
動けない。
動かなければという、意思はあるのに体が動かない。
蛇に睨まれたカエルのごとく、体が硬直してしまっている。

動け動け動け
動け動け動け動け動け動け
動け動け動け動け動け動け動け動け
動け！

アシドはますます私に近づいてくる。
近づいてくる間に、また新たな炎を生み出していく。
あれが私に当たったら――昨日のことが蘇る。

殺される！

バチィ。
突然の雷に驚く私。
雷は私を守るように目の前に落ちて、地面を焦げ付かせた。

――！

「アリアさん・・・・・・」
「怪我はないわね」

助かった。
ほんとに死ぬかと思った。
硬直していたはずの体が震え出している。
緊張の糸が切れたみたいだ。

――だめだ。
体の振るえが止まらない。
座り込みそうだ。

「ああ、お前か。」
「今度こそ貴様を殺す！」
「ふん、錬金術師を前にお前を殺してやろう」
――昨日と同じだ。
また、私は何も出来ずに突立っている。

「ひかる！」
「ガー助」
「返事くらいしろよな。バカ！」
「ごめん。聞こえなかった」

ほんとなにしてるんだろう。私・・・・・・。
昨日も今日も何も出来ないままでいる。
ヒーローになるって決めたのに・・・・・・。

――これじゃーあ、だめだ！
「ガー助！」
「なんだよ？」
「戦闘はアリアさんに任せて、私たちは出来ることをやるわよ」

「そりゃいいけど、何する気なんだよ？」

ヒーロー

「今から考えるわよ」
アリアさんを見るとバチバチという音ともに、魔力が上昇している。
もちろん、アシドの魔力も同じように上昇している。
２つの魔力がぶつかれば、きっとこんな小さな丘は吹き飛んでしまうだろう。

！
なんだ。
出来ることあるじゃない。

「ガー助！　行くわよ」
――そう私はこれでいい。
闘うだけがヒーローじゃないんだから！

＊

「よし、ここがいいわね」
――走った。
端までくるのに時間は掛からなかったけど、けっこうきつい。

足元を見ると家々が覗かしている。
すこしでも足を踏み外せば、間違いなくあの世行きだ。
でも、アリアさんの邪魔にならずに、この丘を守るにはここしかない。
「でっ、どうやって守るつもりだ？」
「えっ」
我ながら、コントみたいなやり取りだった。

最強の門番ならまだしも、ガー助にそんな力はなかった。
どおおん。
「きゃあああ」
――落ちなくて良かった。
ガラリと音を立てて、足元が少し崩れる。
すぐ下をみると、やっぱり家々が覗いている。
うん。
落ちなくて良かった。
命拾いするの何回目かな。
――危ない。
「なにをやってるんだ」
声がしたかと思えば、空からにゅっと腕が生えた。
――もしかして！
「喜一郎くん！」
「たく、守るつもりなら、ちゃんと守れ」
「ごめん。助かった」
かなりの衝撃だったのに、最小限の被害ですんだのは喜一郎くんのおかげだったみたい。

発動

やっぱり、喜一郎くんには敵わないなぁ。
私がやりたかったことをやっちゃうんだもん。

そうだ！
アリアさんは？

アリアさんはどうなったんだ。
『アリアさん！』
――煙が。
小さな丘を覆い隠すように、白い煙が立ち込めている。

これじゃぁ、よく分からない。

「貴様・・・・・・」
――えっ？
煙の中から声が。

しかもこの声は。
「なぜ生きている？」

驚くのは無理もない。
死んだ人間が生き返っているんだから。

「答える義理はない」
「ふざけたことを」

――アリアさんは？

煙が晴れてきたものの、アリアさんの姿が確認できない。

「アリアさん！　聞こえてたら返事して！」

「おい！　ひかるあっちだ」

「分かった」

煙が立ち込める中、ガー助についていく。

ガー助に搭載している、レーダーはこんな煙もものともしない。

喜一郎　Ｓｉｄｅ

「どうした。もうお手上げか？」

てっきり、すぐにでもあの円陣を使ってくると思ったが、使ってくる様子がない。

なぜだ？

・・・・・・もしかして、魔力が足りないのか？

「なら、こちらから行くぞ」

「そうだな。出し惜しみしても仕方ない」

「っ！」

どういうことだ？

――カッ。

奴のピアスと同様、空に浮かぶ円陣が淡い光を放ち始める。

昼間なら目立たないような光だが、暗くなり始めた今ならよく分かる。

「くそっ」

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

うわごと

もう！
早く何とかならないの。
辺りは一面の白い煙。
その煙に咽ながらも進んでいく。
――！
煙の中に倒れているアリアさんを見つける。
「アリアさん。しっかり！」
息はある。
――良かった。

「・・・・・・さん」
「えっ、なに？　アリアさん」
「――さん・・・・帰ってきて」
「・・・・・・アリアさん。やっぱりあなた」

プルルルル。

＊

電話？
誰よ。急いでるときに！

「はい。鳥屋ですけれど」
「ひかるか」

「お兄ちゃん？　悪いけど、今急いでるから」
我ながら雑な対応だ。
客応対としては最悪だなと思いながら、受話器を置こうとする。

「まて、話を聞け！　アシドについて、分かったことがある」
「それなら知ってるよ。魂を使って、巨大魔術（メテオ）を発動させようとしてるんでしょ」
「なに？」
「違うの？」
「ああ」
驚いたような師匠の声。
この話以外に何の話があるというのか。
「ごめん、お兄ちゃん。やっぱり切るわ」
「だから待てって・・・・・・奴には娘さんがいるだ！」
「娘さん？」
「アリア＝スタイン」

なっ！
アリアさんがあいつの娘なんて。
お兄ちゃんはまだ何か言っていたけど、驚きのあまり覚えていない。

＊

ちゃらり。
アリアさんの首から、なにかが飛び出してきた。
これって。
魔術道具。“サーチ”
レーダーと同じ働きを持つペンダント。

そっか。

アリアさんこれで、アシドを探してたんだ。

メテオ

「ひかる。どうしたんだよ？」
「うん、ちょっと」
「ガー助・・・・・・。喜一郎くんどっち？」
「ああ、あっちだ」
ガー助が言う方向にはあいかわらず、煙が充満している。
空。
よく見えないけれど、きっと不気味に存在しているはずだ。
急がなければ。

アシド　Ｓｉｄｅ

これで死んだはずだ。

摂氏３０００度――。
その炎を奴の真上に食らわせてやった。
これなら、いくらなんでも生きているはずがない。

それにしても、すばらしいものだ。
真の力ではないとはいえ。
これほどの破壊力とは。

目の前には大きな穴。
わたしが立っている場所以外のほとんどを焼きつくとは。
むしろ、残っている箇所の方が少ない。

「なにがおかしいんだ？」

なっ。
空から声だと。
空中に亀裂が入り、そこからゆっくりと両足が降りてくる。
まるで、空から人が生まれる感覚で、服を着た喜一（やっ）郎が現れた。
「ばかな」
人が生き返るなんて。
この目で見ても、信じられるものではない。
「悪いが俺の体には、魔術が掛けられているんでね」
Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

メテオ（後書き）

掛けられた魔法

おるたで存在しているのは魔術ではなく魔法。
その魔法により、喜一郎は不老不死である。
ちなみにイヨも錬金術の応用により、２０代の姿を保っている。

光輝いて

ドォーン。
けたたましい音。
地震みたいに地面が揺れて、足をとられる。

「きゃあ」
――なに？
今の衝撃！？

「大丈夫か？　ひかる」
「うん。行こう」
この煙では何が起こってるか分からない。
とにかく、煙の外に出なくては。
煙を思い切り突き抜ける。

「わっぷ」
ごほごほ。
煙が目に沁みる。

――なっ。
ようやく、煙を抜けたと思えば、顔に光が当たる。
昼間見たときよりも、円陣は光を増していた。

まさか。
さっきの衝撃って。

喜一郎くん――！
いや、喜一郎くんなら大丈夫だ。人外だし。

それにして遠い。
短い距離のはずなのに、やたら遠く感じる。
もっと、早く走れたらいいのに。

――！
見えた。
喜一郎くんの後姿。
後ろから見ても、頭がぱっくりと割れているが分かる。

いったい何回、死んでしまったのだろう？
「喜一郎くん！」
「東宮？」
「いま、援護するから」

“どうやって？”
こんなときに限って、何も思い付かない。

なにか、なにかないのか？
なにかできることは？

いろいろ考えてみるものの、いい手が浮かばない。

出来ること

もう、なんだっていい。
とにかく、喜一郎君に近づければ。

「ていやー！」
私はやけくそ気味に、エクスプロープを投げつけてやる。
エクスロープは奴に絡まり、爆発を起こすと土煙が巻き起こる。

よし！
もしかして、かなり良かったんじゃない？
煙の量が半端じゃない。
後は喜一郎くんに頼むだけ。

「喜一郎くん！　頼みがあるんだけど」
「なんだ？」
あいつの前で、悠々と話しこむ私たち。
この煙では、相手からはなにをやっているか分かるまい。

「なっおい。ひかる！」
「そんな危険なことをする気なのか？」

「うん。これくらいやらないと。――お願い。喜一郎くん」
「分かった」
背中から風を感じる。
振り向かなくても分かる。喜一郎くんが風を詠んでいるんだ。

「行くぞ」
「うん。よろしく」

空を飛ぶって、こんな感じなのかな？
背中に風を感じながら、奴に向かって飛ばされた。

――えっ。
高い。
しかも速い。

ジェットコースター並のスピードで飛んでいく。
自ら望んだとはいえ、これは怖い。
『きゃあああ』

いただきます

『なに？』
煙を一気に突き抜けると、驚いた顔をしたアシドの姿があった。

ごちん。
思いっきり、頭突きを食らわせてやった。

ううぅぅ。
――痛い。

だけど、ある意味うまくいった。
反撃する暇もなかったのだろう。

「いただきます」
気絶したアシドを前に手を合わせる。
そして、胸の辺りに右手を当て、アシドの魂を吸い取ってやった。
これが私のもう一つの必殺技。

どくん。

――あれ？
熱い。

あいつが集めた魂を吸い取っただけなのに。
やたら、体が熱い。

「おい。東宮！」
「えっ？」

そこには人とは思えないほど、顔の白いアシドの姿があった。
これじゃぁ、まるで――。

「・・・・・・殺したのか？」
「そんなはずは」
「心配は要らないわ・・・・・・」
アリアさん！
いつから気が付いていたの！？

「だって、そいつは最初から死んでいたんだから」
――えっ？

「死んでいたって、どう言うこと？」

いただきます（後書き）

ラーの天秤

ガー助に己の命を与えるだけでなく、他人の命も吸い取れるまさにチート。

過去

「言葉の通りよ・・・・・・。少し、昔話をしましょうか？」
「えっ？」

「そう、あれは――。
何年か前の真夜中だったわ」

アリア　Ｓｉｄｅ

「お母さんに会いたくはないか？　アリア」
「うん」
優しい言葉だった。
その言葉に何の疑問もなかった。
なにより、小さいころに亡くなった母に、もう一度会いたかった。

「さぁ、アリア。ここに立ってごらん」
床に描かれた見知らぬ円陣の上に誘導させられた。

「えっ」
何が起こったのかなんて、分からなかった。
円陣に立った瞬間、円陣から強い光が溢れ出した。

『うわあああ』

！

『お父さん！』

【それはこれの事か？】

――えっ。

低い声だった。

まるで、地の底から出すようなそんな声。

それは父の姿でありながら、別の何かだった。

「あなただれ？　お父さんをどうしたのよ！」

【さぁな。だが、この体はわたしが貰い受けた】

「ふざけないで！　返してよ」

【なら、取り返しに来い】

今でもよく覚えてる。

奴の憎たらしいまでの笑顔を――。

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

エピローグ

「それ以来、ずっとお父さんを奪った、あいつを追いかけてきた」
「アリアさん・・・・・・」
「これでやっと、やっと・・・・・・取り返せた」
アリアさんはお父さんを抱えるように抱きしめている。
彼女の涙を見ながら、しみじみ思う。
――良かった。

「やっと、終わったな」
「うん」
「まぁ、ひかるはほとんど、なにもしてないけどな」
うっ・・・・・・。
今回も喜一郎くんに助けて、もらいぱなしだった。

「今回もありがとね・・・・・・。喜一郎くん」
「いや、かまわん」
それにしても、なんとも濃くて長い2日間だった。

「それじゃあ、またね。錬金術師さん」
「ええ、またね。魔術師さん」
「ありがとう」
アリアさんはそういって、立ち去っていった。
彼女の顔からは、もう憎しみの色は消えていた。

可愛らしい。
本当に清々しいほどの笑顔だった。

あれが本当の彼女の顔だ。

これからは復讐など、考えない人生を歩んで欲しい。

しかし――。

「依頼失敗か。せっかくお金が入りそうだったのに」

夕日がやけに目にしみる。

私は別の意味で泣きそうだった。

エピローグ（後書き）

長々とありがとうございました。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3085k/

ヒーローＬＶ１

2010年10月12日03時48分発行